

【教員寄稿】

ポルトガル語を学び始めたみなさんへ

武田千香

大学でポルトガル語を、そしてブラジルの文化や社会について学ぶことにされたみなさん、おめでとうございます。無数ともいえる可能な進学先の中でポルトガル語とブラジル研究を選ばれたみなさんは、たいへんよい選択をされたと思います。

実は私も、大学でポルトガル語を専攻し、いまに至っています。ブラジルに強い関心を抱き、ブラジルへ行くにはまずはポルトガル語とブラジルについて学びたいと思い、大学は違いますが、ポルトガル・ブラジル語学科に進学しました。そもそもブラジルへの関心が生まれたのは、中学から高校にかけてのことでした。いま思えば、なにか予感があったのだと思います。ブラジルはきっと私を幸せにしてくれると。そして大学に入り、学部3年が終わってから念願かなってブラジルに1年間、滞在する機会を得ました。ブラジルは私の期待を裏切らず、大学を卒業してからも、私は常にブラジルを求め、ブラジルを支えに生きてきたような気がします。なぜそこまで惹きつけられるのか、しばらくわからないままだったのですが、私にとってブラジルを研究することは、ブラジルが好きな自分とは何なのかをみつけることも重なっていきました。

そしてつい最近になってその答えが少しわかってきたような気がしています。答えは、数年前に翻訳を出版したマシャード・ジ・アシス（1839～1908）の『プラス・クーバスの死後の回想』（1881）のなかにありました。マシャード・ジ・アシスは19世紀のリオデジャネイロに生きた作家で、ブラジルの人々がたいへん誇りにしている文豪です。その影響力は大きく、現代の作家でも、肯定的であれ否定的であれ、マシャードの影響を受けていない人はいないとすら言われるほどです。

『プラス・クーバスの死後の回想』は、『ドン・カズムッホ』（1899）と並んでマシャードの代表作で、ブラジル文学百選のアンケートをとると、第一位に輝くくらいのブラジルのいわば古典文学です。さすが古典文学とされるだけあって、そこにはブラジルのありようが見事に描きこまれています。その作品を深く研究することで、ブラジルの人・文化・社会に通底するいわば「特質」のようなものが見えてきたわけです。

みなさんは、ブラジルに対してどのようなイメージをお持ちでしょうか？ 明るくて陽気な人々？ それとも情熱的な人々でしょうか。実際に接したことのある方ならば、ユーモアがあって、心温かい人々だという印象を持っている方もいらっしゃるかもしれません。もちろんブラジル人だって、陽気でない人や生真面目で暗い人もいて、そんな言説はステレオタイプに過ぎないと言うこともできるでしょう。たしかに個人差はあるのですが、それでもそうしたイメージは、ある一面とはいえ、けっこう「ブラジル文化」の核心をついているのではないかと最近考えるようになってきました。そしてブラジルのそうした陽気さや力強さ、ダイナミックさも、マシャードの作品を通して見えてきたその「特質」と大いに関係があるように思っています。それは言ってみれば、西洋でもなく、かといって非西洋でもないゆえに育まざるを得なかった文化の叡智ともいえるものです。

そして私がいま感じている“幸せ”も、そこから得た学びが大きく関わっています。さらには、そこに現代の日本社会の行き詰まりを打開するヒントも隠されているようにも思うのです。冒頭に、みなさんがよい選択をされたと書いたのは、これを念頭においてのことでした。

授業では、これらのことについてお話できればと思っています。

その起点はやはりマシャード・ジ・アシスの『プラス・クーバスの死後の回想』です。初回ではまずその作品に現われる人間やブラジル社会の特質に迫り、その後は、それをブラジル人の行動様式とされるジェイチーニョにも敷衍させながら、ブラジルの社会や文化の理解も深められたらと思っています。授業の中では、ジョルジ・アマードの文学にも触れる予定です。

文学は、人間の生がみごとに描きこまれています。マシャードの文学を通して、ブラジルの生き方や発想に迫り、それぞれの人生がいつそう豊かなものになるきっかけとなることを願っています。